縄文時代早期の磨製石鏃について

宮　田　栄　二

Polished Arrowheads in Jomon Earliest Period

Miyata　Eiji

要旨

縄文時代早期，全面を研磨した磨製石鏃は，近年その資料数が増加している。最近調査された出土例を概観した結果，磨製石鏃の形態は５類に分類できた。そして共伴土器から時期的な位置づけと形態の変遷を検討した。さらに磨製石鏃の製作技術と機能にも触れる。そして出土分布と石材環境の面から磨製石鏃が製作・使用された背景を明らかにした。

キーワード：縄文時代早期，磨製石鏃，石器石材，製作技術

1　はじめに

縄文時代草創期から早期における南九州地域は，日本列島における他の地域ではみられない独特な遺構・遺物が多い。

草創期における船形配石炉あるいは早期における竪穴の外部に柱穴がめぐる住居跡などの遺構や，遺物では幅広の隆帯で厚みのある隆帯文土器，また早期の壺形土器や角筒土器，そして石器では榎ノ原型石斧と呼ばれる円筒状の丸ノミ形石斧などが南九州の特殊な遺構・遺物として知られている。

今回取り上げる磨製石鏃も最近になって出土例が増加しているものであり，他の地域ではほとんど例のない南九州的な遺物である。

これは西北九州などの地域で縄文時代早期遺跡に多い局部磨製石鏃とは全く異なり，全面を丁寧に研磨した石鏃である。局部磨製石鏃は出現時期が縄文時代草創期から早期前半と南九州のものとほぼ同じであるが，黒曜石を使用し，通常の打製石鏃を製作した後，中央部を薄くするため研磨が施されたものであり，南九州の磨製石鏃とは石材選択の点や製作技術など全く異なっている[1]。

かつて筆者は南九州縄文早期の磨製石鏃を集成（宮田 1994）しているが，当時６遺跡７点でしかなく，極めて特殊的な存在と考えていた。しかし，その後出土例が少しずつ増加し（大久保 1996），現在では南九州縄文時代早期を示す代表的な石器の一つという位置を占めるほどになっている。

2　主要出土遺跡の概要

前回集成した時点では，塚ノ越遺跡，西丸尾遺跡，榎崎Ｂ遺跡など，そのほとんどが１遺跡１点のみの単独出土に近い状況であった。時期としての共伴する土器型式は早期前半の前平式土器及び後半の塞ノ神式土器であった。それ以後，一つの遺跡で複数あるいは多量に出土する例が増加してきた。以下，近年調査された主要な出土遺跡について，共伴する土器や打製石鏃の出土状況を含めて概観していきたい。

①田代町荒田原遺跡（第２図９～12）

大隅半島の南よりの中央部に位置し，標高292mの台地に所在し，雄川に面して立地している。

主体となる土器は岩本式土器と前平式土器であり，磨製石鏃は頁岩製の浅い凹基式のものが３点と未製品の可能性

第１図　磨製石鏃出土遺跡

が考えられているものが1点出土している。いずれも先端部を欠損しているものである。他に打製石鏃は比較的大型の頁岩製が3点出土している。

②川辺町鷹爪野遺跡

薩摩半島南部の中央寄り，標高約130mの台地に所在する。住居跡の可能性が高い竪穴状遺構8基と集石3基が検出されており，岩本式土器及び前平式土器に共伴して総数29点の頁岩製磨製石鏃が出土している。このうち完形品もしくはそれに近いものは8点あり，大きさは平均して長さが約3～3.5cm　幅1～1.3cmを測ると報告されている。概報のため実測図が掲載されていないのが残念である。また磨製石鏃の未製品などが20点出土しており，それらの中には擦り切りによる素材分割を示す資料も出土している。他に打製石鏃は黒曜石製3点とチャート製1点の計4点出土しているほか，長さ13cmの粘板岩製の磨製石槍も1点出土している。

③田代町ホケノ頭遺跡（第2図2～8，3図21・22）

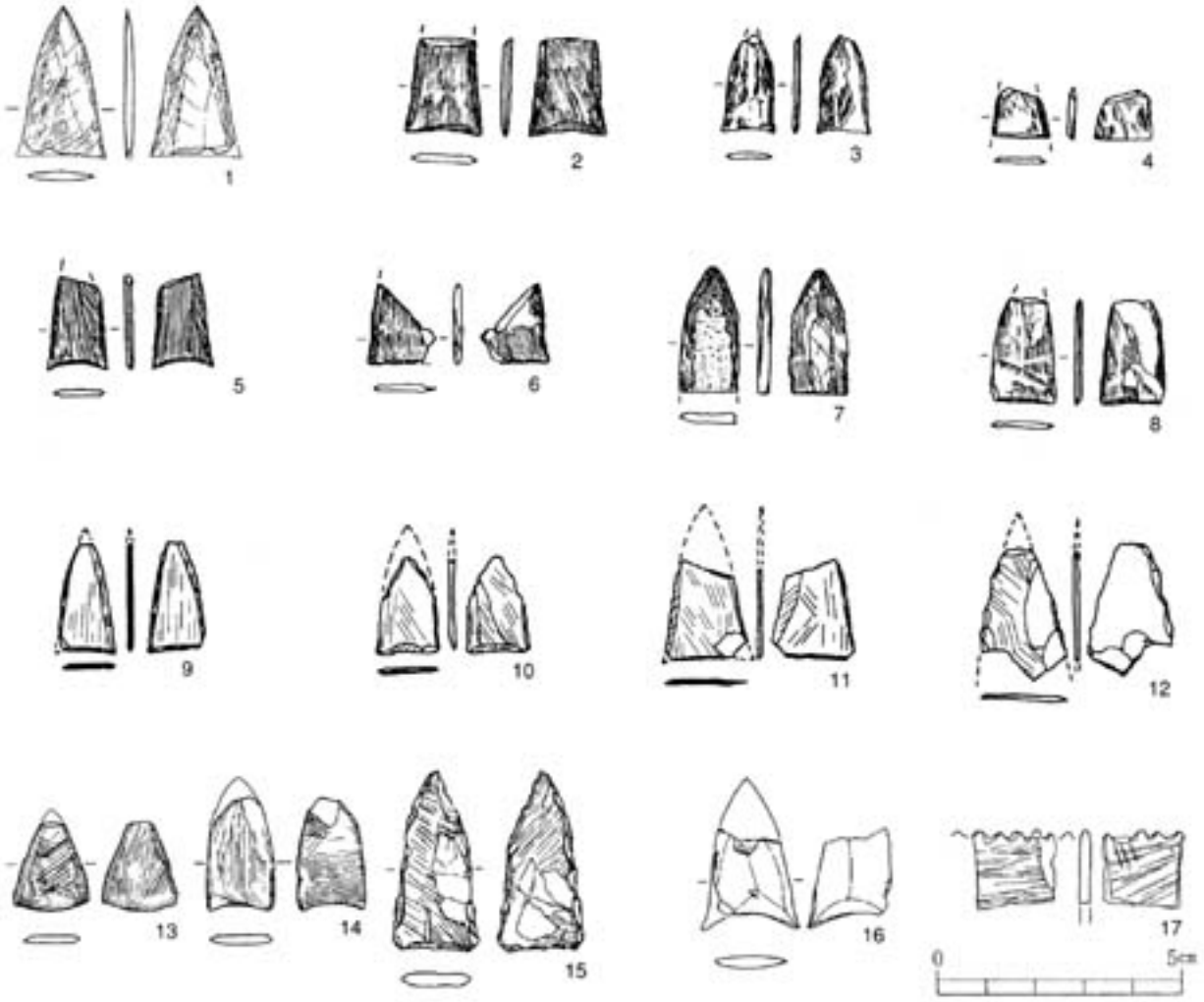
荒田原遺跡に近い位置にあり標高は217mである。岩本式土器や前平式土器に共伴してB地点で粘板岩製の磨製石鏃は7点，打製石鏃は水晶製のものが1点出土している。D・F地点では磨製石鏃が2点出土し，打製石鏃は出土していない。磨製石鏃は荒田原遺跡出土と同じ形態のものである。またB地点では磨製の石槍片と推定されるものも出土している。

④中種子町牛之原遺跡（第3図17）

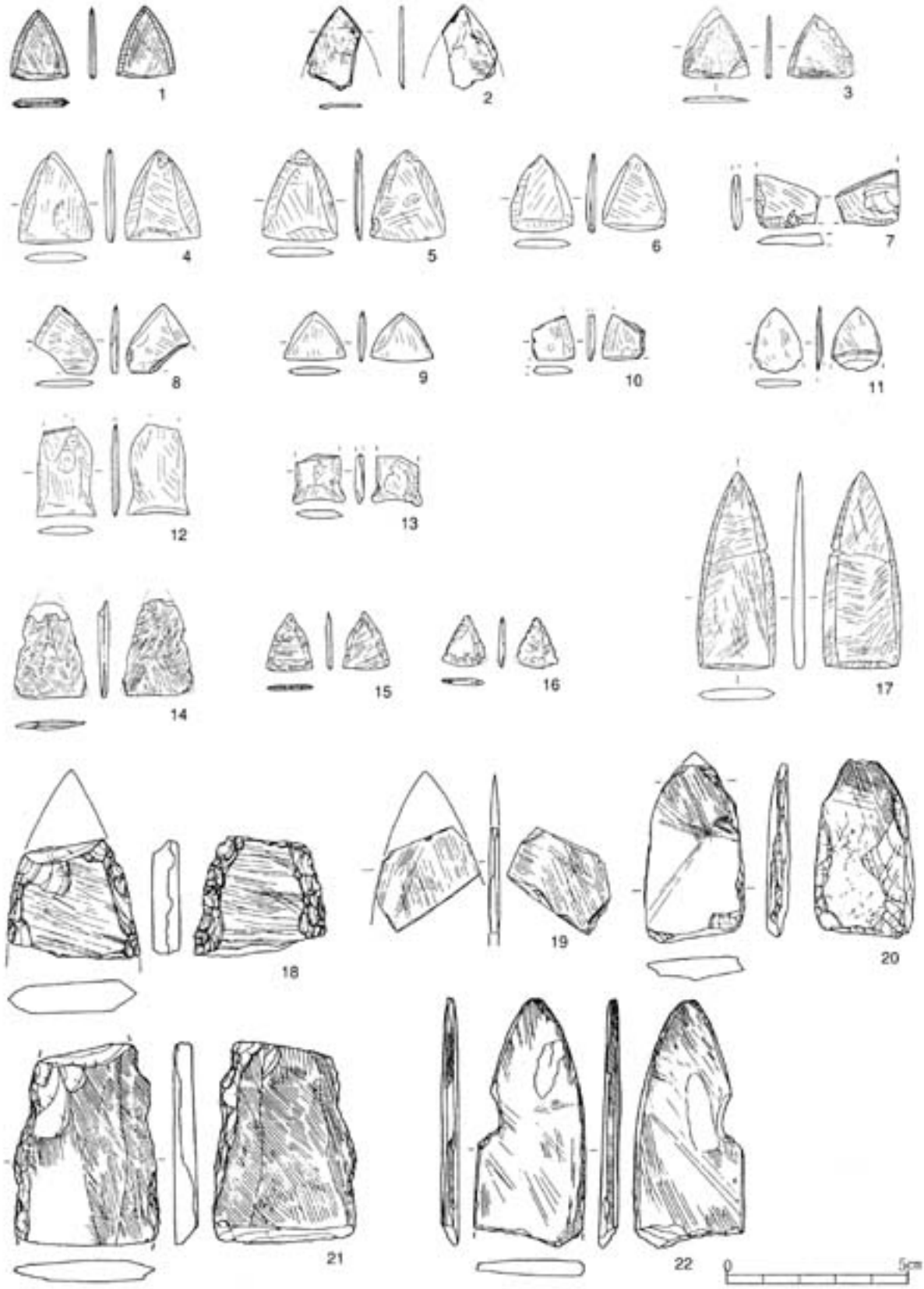
標高約100mの台地に位置し，塞ノ神式土器に伴い長さ5cmを越す大型の磨製石鏃が1点出土している。チャート製の打製石鏃も1点出土している。

⑤西之表市奥ノ仁田遺跡（第2図1）

標高134mの種子島のほぼ中央の台地に位置している。縄文時代草創期に属する唯一の例である。隆帯文土器に伴い1点出土している。また研磨が施された未製品も2点出土している。他に打製石鏃は鉄石英及び頁岩製のものが3点出土している。



第2図　磨製石鏃（1奥ノ仁田，2～8ホケノ頭，9～12荒田原，13～15小牧3A，16・17岩本）



第3図　磨製石鏃と磨製石槍（1塚ノ越、2西丸尾、3塚崎B、4～13赤馬頭、14～16石ノ華、17牛之原、18～20岩本、21・22ホケノ鍋）

第４図　三角山Ⅰ遺跡磨製石鏃

⑥加世田市志風頭遺跡（第３図４～13）

標高約60mの台地に所在している。縄文早期の土器は少量の岩本式があるが，大部分は前平式土器であり，それらに共伴して磨製石鏃は合計18点出土しており，加えて磨製石鏃未製品が16点出土している。

磨製石鏃の形態は長さが短く基部がわずかにふくらむものが大部分であり，一部二等辺三角形のものも含まれる。打製石鏃は黒曜石，チャート，頁岩，鉄石英のものが計16点出土している。

⑦南種子町石ノ峯遺跡（第３図14～16）

種子島南部で中央寄りの標高約160mの台地に所在している。塞ノ神Ｂ式に伴い頁岩製の磨製石鏃が３点出土しており，この３点はそれぞれ大きさや形態が異なるものである。また打製石鏃は１点出土している。

⑧指宿市小牧３Ａ遺跡（第２図13～15）

標高65mの台地に所在している。吉田式土器を主体としているが，若干の前平式土器と少量の加栗山式土器や桑ノ丸式土器を含む。磨製石鏃は３点出土しており塚ノ越出土例と荒田原出土例に類似するものが各１点と，未製品の可能性がある縁辺に剥離痕が残るものが出土している。打製石鏃は黒曜石，頁岩，石英を利用したものが計５点出土しており，それらの形態は多様であり時期的な差が考えられている。

⑨中種子町三角山Ⅰ遺跡（第４図）

種子島の中央部の標高245mの台地に所在している。磨製石鏃は塞ノ神式土器に伴い２点出土している。いずれも中央に１ヶ所穿孔をもつものである。

⑩吾平町原口岡遺跡

前平式土器に伴い５点の磨製石鏃が出土している。塚ノ越遺跡例と同様の形態のものと，荒田原遺跡例と同形態のものが各２点ずつ出土している。そのほかの１点は両側縁を研磨により鋸歯縁に整形している。

⑪給良町建昌城跡

標高約110mの台地に所在しており，前平式土器に伴い磨製石鏃が１点出土している。先端部のみの欠損品であるが，荒田原タイプと思われる。また打製石鏃は黒曜石製やたんぱく石製のものが多く出土している。

３　磨製石鏃の形態分類

以前磨製石鏃を集成した時点では単独出土が多く，また出土遺跡も少ないなかで形態分類を行い，大きく１類と２類に分類した。しかし，その後の資料の増加に伴いこれまでにない形態も認められるようになり，ここでは新たに再分類を行うものである。

①長身細型（荒田原タイプ）

基本的に二等辺三角形に近い形状であり，長さに比較して幅が狭く，基部はわずかに凹む。両側縁は基部近くで幅が少し狭くなり，基部端で外側に広がる特徴をもつ。両面を面的に研磨後両縁辺を両面から研磨し鋒をつくる。基部も同様なものが多い。

荒田原遺跡，ホケノ頭遺跡のほか鷹爪野遺跡で多く出土している。

②短身広型（塚ノ越タイプ）

正三角形に近い形状であり，長さと幅がほぼ同程度となる。両側縁は直線状よりわずかに丸味をもち，基部も直線的ではなく，わずかにふくらむのが特徴である。両平面は面的に研磨され，縁辺は鎬状に研磨され鋭くされている。基部は側縁と同様なもののほかに細い基部面を有し面的に研磨されているものもある。塚ノ越遺跡，西丸尾遺跡や榎崎Ｂ遺跡などこれまで単独出土例が多かったが，志風頭遺跡では多く発見されている。

③長身広型（牛之原タイプ）

全長５cmを越す大型品であり両側縁は直線的ではなく丸味をもち，基部もわずかにふくらむ。短身広型を長く大型にしたような形態である。牛之原遺跡と石ノ峰遺跡で各１点ずつ出土している。

第５図　磨製石鏃の形態分類

	長身細形	短身広型	長身広型	鋸歯縁型	穿孔型	合計	磨製石鏃	打製石鏃	共伴土器
奥ノ仁田	1					1		3	隆帯文土器
岩本	1					1	4		岩本式土器
ホケノ頭	7					1	3	1	岩本式土器・前平式土器
荒田原	3					3		2	前平式土器
鷹爪野	29					29	1	4	岩本式土器・前平式土器
原口岡	2	2		1		5			前平式土器
小牧3A	1	1				2		5	吉田式土器・加栗山式土器・前平式土器
志風頭	2	16				18		16	前平式土器・加栗山式土器・岩本式土器
建昌城跡	1							多数	前平式土器
西丸尾		1				1			前平式土器
塚ノ越		1	1			2			前平式土器
榎崎B		1				1			前平式土器・石坂式土器
宇治ノ原		1				1			前平式土器
木落		1				1			塞ノ神式土器
牛之原			1			1		1	塞ノ神式土器
石ノ峯		1	1	1		3		1	塞ノ神式土器
三角山I					2	2			塞ノ神式土器

第1表　縄文時代早期の磨製石鏃形態と共伴土器

④穿孔型（三角山タイプ）

穿孔をもつ磨製石鏃で，三角山遺跡では基部近くに穴をもつものと，中央部に比較的小さい穿孔をもつものとが出土している。このような穿孔を有するものは，中種子町の須行岡遺跡で1点と西之表市古田二本松遺跡採集のものとが知られており，現時点までこの形態は全て種子島からの出土となっている。

⑤鋸歯縁型（石ノ峯タイプ）

両側縁は直線状ではなく，研磨によって鋸歯状に仕上げているものである。このような例は石ノ峯遺跡のほか原口岡遺跡で出土しているほか，破損品と思われる鋸歯縁辺部分が岩本遺跡でも出土している。

なお鋸歯縁型については，石ノ峯遺跡例が小型の三角形を呈し，基部は丸みを持ちふくらむタイプであるのに対し，原口岡遺跡出土のものは先端部のみであるが，形態は長身細型にちかいと推定される。

一方，宮崎県瀬戸口遺跡出土例は，細長い柳葉型を呈している。

このように鋸歯縁型のなかでも形態的に細分が可能であるが，類例の増加を待ちたい。

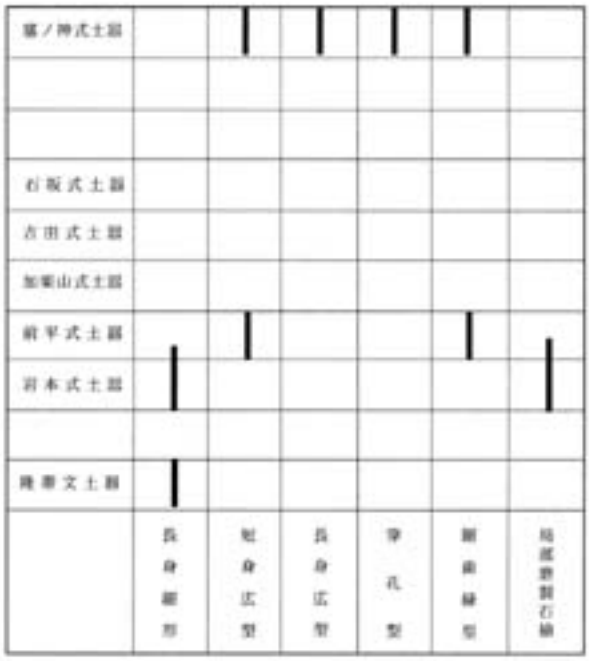
4 形態と時期

縄文時代早期においても他の時期と同様に，出土土器は単独型式のみの遺跡あるいは文化層はなく，例外なく数型式の土器が同一包含層から出土している。しかし，多種の型式から構成されていても主体となる土器型式が当然あり，今回それをもとにしたのが第1表である。

南九州縄文時代早期前半土器は貝殻文系土器が主体であり，新東晃一による細分と編年案により整理され（新東1988），最近黒川により集成が行われている（黒川2002）。貝殻文系土器は岩本式から前平式そして加栗山式と変化していくと考えられる[7]。

先に分類した磨製石鏃の形態と土器型式による時期区分との関係は，時期とともに変化していくことが理解できる。すなわち，長身細型は草創期隆帯文土器の時期に出現している。そして岩本式土器が主体であるホケノ頭遺跡出土例は全て長身細型であり，また前平式土器が主体である志風頭遺跡では短身広型が大部分を占めている。このように長身細型は縄文早期岩本式土器段階まで継続し，前平式土器段階では短身広型に変化する様相が理解される。（第6図）

また縄文時代早期後半期の塞ノ神式土器段階で，新たに



第６図　磨製石鏃の形態と消長

長身太型や穿孔型などが認められるようになる。

磨製石鏃のなかで形態的に打製石鏃と異なるのは，早期前半の長身細型と短身広型であり，これらは弥生時代の磨製石鏃とも特徴的な形態的差異が認められる。

なお，磨製石鏃は縄文時代早期のみでなく，縄文時代後期～晩期においても計志加里遺跡など一部の遺跡で数は少ないものの製作されているが[2]，それらの形態は打製石鏃とほぼ近似している。

5　製作技術

各遺跡で出土した磨製石鏃の未製品から製作技術を追ってみる。

使用されている石材は頁岩及び粘板岩であり，薄く偏平に割れやすい石材を利用している。荒田原遺跡出土の未製品は，石鏃の形に粗く折り取るような打ち欠きで整形したものに研磨が施されている。縁辺を研磨する直前のものと考えられる。

志風頭遺跡出土の未製品は，荒田原遺跡と同様に粗い剥離で大まかに整形したものに部分的に研磨が施されたものと，石鏃よりも幅広の偏平素材に研磨が施されたものが認められる。

一方，鷹爪野遺跡では多量の未製品が出土しているが，それらの中には浅い溝状の擦り切り痕が認められるものが複数出土しており，磨製石鏃の製作において擦り切り技法を使用していたという事実が判明した。

これらの未製品から，磨製石鏃は頁岩ないし粘板岩を利用し石材の目にそって割ることにより薄い板状の剥片をつくり，大まかな粗い割り取りにより整形し，その後全面を研磨し，最後に縁辺を研磨する方法と，比較的幅広の素材を両面研磨し，擦り切り技法により石鏃の形を決定し，その後再び縁辺を研磨し，鋭い縁辺につくる方法の二つの方法が認められる。ただし，二つの方法は別々のものでなく，製作過程の前後過程である可能性も考えられる。

6　磨製石鏃製作の背景

筆者は前回の集成において，機能的展望については，当時出土数は少なかったものの，それらのなかで先端部分が欠損したものが多いことから，装飾品ではなく，実際に使用されるものであると考え，また出土点数が少ないことから，実用とは別の祭祀用の使用がある可能性を考慮する必要があると述べた。現在出土例が大幅に増加した結果，完全品は塚ノ越例１点と志風頭例２点と三角山例１点及び石ノ峯例２点のみであり，磨製石鏃の大部分が欠損した状態であることから，確実に使用されていることが補強された。そしてホケノ頭遺跡，鷹爪野遺跡，志風頭遺跡，荒田原遺跡などでは，磨製石鏃の数が打製石鏃より出土数が多いのである。このことは磨製石鏃も打製石鏃と同様に，通常の狩猟具として使用されていたと判断できる。

また，各遺跡は全て台地に立地しており海岸より遠く，大きな河川も近くに所在せず，また薄く製作されているが漁労用の話ではなく，打製石鏃と同様に，動物を対象とした狩猟具として利用されたと考えられる。

では何故磨製石鏃が製作されたかについて検討してみよう。

磨製石鏃の出土遺跡分布は薩摩半島南部と大隅半島南部及び種子島などに集中している。これは石鏃製作に適した黒曜石の原産地から遠く離れた場所として考えることができる。つまり，出土する時期である岩本式土器や前平式土器の出土分布はほぼ県内全域であるのに対し，このなかで

第7図　黒曜石原産地と剥片石器の原産地

磨製石鏃が出土するのは，南部地域に片寄っていることが理解できる。南九州における薩摩半島南部と大隅半島南部の共通点は石器石材原産地との関係でとらえることができる。

石鏃などの小型の剥片石器を容易に製作するための石材はガラス質である黒曜石あるいはチャートなどが適しているが，これらの原産地は薩摩半島南部や種子島には存在していない。ただし，坊津町牧場や枕崎市東鹿篭では鉄石英の原産地が所在しているが，産出する原石はかなり硬く押圧剥離は容易ではない。

また大隅半島南部には黒曜石原産地として長谷があるが，長谷産の黒曜石は粘りがなく，小型の剥片石器製作には向いてなく，石鏃などには全く使用されていない。そこで容易に入手可能な居住地周辺の頁岩や粘板岩などを利用するため，頁岩・粘板岩，それらの岩石特性に適した石鏃製作方法が磨製石鏃であったと考えることができる。このことは磨製石鏃の出土分布が的確に示しており，製作の背景の一つであると考えて間違いない。

黒曜石原産地やたんぱく石原産地に比較的近い建昌城跡や，黒曜石原産地に近い前原遺跡では打製石鏃が多く，磨製石鏃は極めて出土が少ないことも，これを裏づける。

また研磨による道具の製作は，骨角器による利器製作に適した方法であることより，磨製石鏃の存在は当時骨角器による利器が存在し，石鏃も同様の技術を応用して製作された可能性も，背景の一つとして考慮する必要があろうか。つまり，結論として言うならば，磨製石鏃が製作された基本的な背景は，比較的遠隔地のガラス質の石材を使用しない，遺跡周辺の在地の石材を利用した石鏃として製作されたのである。

このことは，早期前半の岩本式土器から前平式土器の時期において生業的に広域的な活動（例えば狩猟の帰りに黒曜石を採取してくるような活動）は少なかったことを意味している。

前平式土器に伴う石鏃として小型三角形鏃の存在が知られているが，これは桑ノ木津留もしくは上青木産の黒曜石を使用するものであり，原産地周辺の遺跡に特徴的である。これも石材と器種形態の結びつきや関連を示す例である（馬籠 2002）。

次ぎに，種子島にのみ出土している塞ノ神式段階の穿孔型については，種子島のみの出土であることと深い関係があると推定される。すなわち穿孔があるものは，石材の代用のみではなく，機能・目的が穿孔のないものとは異なると判断される。鏃形で穿孔を有するものは，骨・角・牙・サメ歯・貝などにより製作されたものに多く認められている。これらは全国の地域で主に縄文時代後期～晩期の時期に出土しており，このなかには銛先として装着された状態のまま出土している例もある（金子・忍沢 1986）。穿孔は，そのものが目的をもって行われた」と考える必要があり，南九州では奄美大島から沖縄地域の琉球列島の縄文前期～後期に認められるクロチョウガイやヤコウガイを利用した貝鏃として多く出土している（盛本 1998）。これらと同様に銛先への装着を含む漁労具としての使用である可能性が高い。

磨製石鏃の穿孔型は，鏃形で穿孔が施された牙・貝・石製品の出土例として，全国でも最古の時期のものであるが，種子島で発生・展開したとは考えられない。本来骨や貝などで製作されるものが，種子島では主に頁岩や粘板岩によって製作されたものであり，その伝統は海が取り巻く文化圏のなかで伝播した可能性を考える必要があろう。

7　おわりに

磨製石鏃と同様の製作技術による磨製石槍あるいは局部磨製石槍が，岩本式土器段階に岩本遺跡やホケノ浜遺跡で共伴している。局部磨製石槍は，局部磨製石鏃と同様に広い地域で認められており，狩猟対象動物や狩猟方法などを含めて，製作された背景も今後検討していく必要がある。

磨製石鏃が製作される背景は，黒曜石などの石材入手が困難などの理由が存在するためと，磨製石鏃の製作に都合のいい石材である頁岩や粘板岩が近くに存在したためであり，南九州という単なる地理的要因からの独自性ではないと言える。ただし，当該期における他地域の非黒曜石地域において全磨製石鏃はほとんど認められず，その意味において必然的にやはり南九州の特殊性として理解する必要がでてくる。つまり石材代用に伴うそれに適応した製作技術という主たる背景とは別に，もう一つの隠れた背景の存在が想定されうるのである。

ここで磨製石鏃の形態について視点を変えてみてみよう。古い形態である長身細型（荒田原タイプ）のプロポーションは，縄文時代草創期の加栗山遺跡出土例や掃除山遺跡出土例などの打製石鏃とは形態が異なることに注意が引かれる。特に基部近くで幅が狭くなり，そして基部両端は逆に幅が広くなり両端は尖る。研磨による整形は，打製よりはるかに自由であり，意識した思いそのままの形が反映できるという特徴がある。つまりこのような形態は意識的なものであり，何らかの形をイメージしたものと思われる。この独特なプロポーションはアオザメのサメ歯をほうふつとさせる特徴であり，海の文化としての南島的な系譜も示唆されうるのである。

また鋸歯縁型については，ホオジロザメのサメ歯を模倣した形態と推定されるのである。

そうなると，縄文時代草創期の椿ノ原型石斧が黒潮圏との関係でその存在が考えられている（小田 1994・1998）ように，磨製石鏃も中国南部を含む黒潮圏との関連を考慮する必要もあろう。今後の新たな展望として磨製石鏃の系譜を追求するためには，黒潮圏地域の貝鏃や骨鏃を視野に入れる必要がでてきそうである。

最後に宮崎県の出土例[5]について触れておく。西都市別府原遺跡では，縄文時代早期中葉の条痕文土器などに伴い磨製石鏃が１点出土している。形態は長身細型にちかく，しかし基部は両端が広くならないものである。共伴している打製石鏃は多様な形態のものが未製品を含めて約700点出土している。

また新富町瀬戸口遺跡では，細長い柳葉形を呈したものが２点出土しており[6]，このうち１点は鋸歯縁である。共伴する土器は隆起線文土器・前平式土器・押型文土器などであり，打製石鏃は多く出土している。

このように，南九州のなかでも鹿児島県と宮崎県との差異が認められ，各遺構や遺物についても単純に南九州だからという理由ではなく，それぞれの存在する背景を探求していく必要がある。

【 註 】

1　磨製石鏃と局部磨製石鏃の関係については，前回の論文（宮田1994）で述べているので参照されたい。

2　加栗山式土器は新東晃一のいう知覧式土器であり，加栗山タイプと呼ばれることもある。また，前平式土器と加栗山式土器との間に「志風頭式土器」が提唱されている（上杉2000）が，ここでは前平式土器に含めている。

3　縄文時代後期～晩期の磨製石鏃あるいは局部磨製石鏃は通常の打製石鏃と比較して極めて出土率が少ない。この時期には石材の供給が広域的であり，県本土において流通がシステム化しているような状況である。そのため，磨製石鏃が存在する理由や背景は当然のことながら縄文時代早期とは異なると考えられる。

4　磨製石鏃の穿孔について，国分直一は台湾の民俗例との比較から紐でつなぐためのものであると述べている（国分1981）。筆者も同様の見解である。

5　宮崎県における磨製石鏃の出土例については，藤木聡氏・松本茂氏にご教示をいただいた。

6　柳葉形の磨製石鏃は，現在まで鹿児島県では類例がない。柳葉型（瀬戸口タイプ）と区別して今後の類例の増加を待ちたい。

【参考文献】

上杉彰紀　2000「調整技法からみた縄文早期貝殻文円筒器」『南九州縄文通信』№14

大久保浩二　1996「まとめ―磨製石鏃について―」『牛之原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター

小田静夫　1994「黒潮圏の丸ノミ形石斧―柊ノ原遺跡の丸ノミ状石斧をめぐって」『南九州縄文通信』№8

小田静夫　1998『黒潮圏の磨製石斧』考古学資料集３日本人および日本文化の起源に関する学術的研究

金子浩昌・忍沢成視　1986『骨角器の研究縄文篇Ⅰ・Ⅱ』考古民俗叢書22　慶友社

黒川忠広　2002「南九州貝殻文系土器」南九州縄文研究会

桑波田武志　2001「まとめ―石器について―」『ホケノ頭遺跡』田代町教育委員会

国分直一　1981『台湾考古民族誌』考古民俗叢書18　慶友社

新東晃一　1998「南九州の円筒土器と角筒土器」『鎌木先生古稀記念論集　考古学と自然科学』鎌木先生古稀記念論文集刊行会

馬籠亮道　2002「桑ノ木津留産黒潮石と縄文時代早期の小形石鏃について」『石器原産地研究会　第２回研究集会資料』

宮田栄二　1994「縄文早期の磨製石鏃」『南九州縄文通信』№8

1996「南九州における細石刃文化終末期の様相」『坂詰秀一先生還暦記念論文集　考古学の諸相』

1998「縄文時代草創期の石器群―隆起線文土器段階の城性とその評価―」『南九州縄文通信』№12

1999「南九州縄文草創期の生業構造―石器組成及び遺構からの視点―」『鹿児島考古』第33号

森本　勲　1998「琉球列島出土の貝鏃様製品小考」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2000「三角山Ⅰ遺跡―不思議な穴のあるやじり―」『埋文だより』第22号

田代町教育委員会　1995『荒田原遺跡』田代町埋蔵文化財発掘調査 報告書（３）

2001「ホケノ頭遺跡」田代町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

西之表市教育委員会　1995「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」西之表市蔵文化財発掘調査報告書（７）

吹上町教育委員会　1990「塚ノ越遺跡ほか２遺跡」吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

金峰町教育委員会　1992「宇治野原遺跡」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）

南種子町教育委員会　1996「石ノ峯遺跡」南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（６）

加世田市教育委員会　1999「志風頭遺跡・奥名野遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（16）

川辺町教育委員会　1998「鷹爪野遺跡」川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書（６）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993『榎崎Ｂ遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

1996『牛之原遺跡」発掘調査報告書（18）

1996『小牧３Ａ遺跡・岩本遺跡』発掘調査報告書（15）

鹿児島県教育委員会　1992『西丸尾遺跡』

姶良町教育委員会　2002『建昌城跡』

宮崎県埋蔵文化財センタ　2002「別府原遺跡　西ヶ迫遺跡別府原第２遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第61集

新富町教育委員会　1986『新田原遺跡・瀬戸口遺跡・蔵開地下式横穴墓』新富町文化財調査報告書第４集